

研究結果報告書

日本帝国下、マイノリティ知識人たちの「二重言語」戦略：植民地朝鮮と沖縄を射程に

所属： 慶熙大学校 教養学部

役職： 客員教授

氏名： 孫 知延

本研究課題「日本帝国下、マイノリティ知識人たちの「二重言語」戦略」の目的は、日本帝国下、被支配民族だった植民地朝鮮と、「日本人」であるが日本帝国の差別から自由ではなかった沖縄出身者の言語に対する認識、具体的には「方言」に転落した被抑圧側の固有の言語と帝国の言語・日本語が共存するいわゆる「二重言語」状況のなかで、それぞれの知識人（作家）がどのような姿勢を取っていたかを比較考察することにある。特に帝国主義が深化して行く1940年代に至ると、日本語をめぐるマイノリティ言語の事情はさらに複雑になる。このような変化は、日本語を国語とする帝国の言語政策が深く関係しているが、「沖縄方言論争」（1940）と「朝鮮語学会事件」（1942）はそれに関する興味深い論点を提供してくれる。そこで、まず、この二つの象徴的な論争・事件に焦点をあわせて、日本語を標準語として朝鮮語と沖縄の言語が「周辺部言語=方言」として押し出されてゆくプロセスを分析した。それぞれ異なった被支配・被差別の歴史によって著しい格差が見えた。例えば、「朝鮮語学会事件」の場合、「内鮮一体」に代表される「皇国臣民化」政策の一環として帝国側から押しつけられたとすれば、「沖縄方言論争」の場合は、日本本土との差別を克服するため、日常生活での必要性などをあげて、沖縄側が進んで方言廃止を主張するという正反対の特徴を見せた。それは日本の言語政策が単純な言語問題ではなく、民族文化抹殺政策を進めようとする暴力的帝国主義の一環であることを強く意識していた植民地朝鮮の場合と大きく異なる。次は、「方言」もしくは「禁忌の言語」として取り扱われていった状況をマイノリティ作家たちの表現戦略を通して分析した。具体的には、韓国の作家である廉想渉、沖縄出身の作家山城正忠、知念正真らの作品を取り上げ、登場人物の日本語に対する認識が、支配/被支配、植民/被植民、抑圧/被抑圧といった二項対立的な権力図式に基づいているのではなく、二つの言語の間を自由に往来し、戦略的に使い分けている主体的な側面を持っていることを確認した。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「日本帝国下、マイノリティ知識人たちの「二重言語」戦略」2015年末発行予定

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

1. 山城正忠「九年母」翻訳『地球的世界文学』地球的世界文学研究所2015年4月号掲載

2. 東峰夫「オキナワの少年」翻訳(『地球的世界文学』2016年掲載予定)

3. 大城立裕「カクテル・パーティー」・「神島」翻訳及び作家とのインタビュー内容(『地球的世界文学』2016年掲載予定)

*以上の作品を「沖縄小説選集」として刊行する予定